

SOKYO  
ATSUMI



ジョナサン・ハマー, *SEEN FROM ABOVE*, 2020, 木のパネルにミクストメディア  
H63 × W63 × D5 cm, in artist's frame

# ジョナサン・ハマー

内覧会: 2021年10月19日(火)  
2021年10月20日(水) - 11月27日(土)

個展

丸川コレクション展

OPERATION  
OCTOPUS

巻物と触手

SOKYO ATSUMI

140-0002 東京都品川区東品川 1-32-8

TERRADA ART COMPLEX II 3階 #304

開廊時間: 11:00 - 18:00 (火 - 木) 11:00 - 19:00 (金・土)

休廊日: 日・月

SOKYO ATSUMI

140-0002 東京都品川区東品川 1-32-8 TERRADA ART COMPLEX II 3階  
+ 81 (0)80 7591 5212

プレスリリース

この度 SOKYO ATSUMI では 2021 年 10 月 20 日（水）から 11 月 27 日（土）まで、ジョナサン・ハマー個展「OPERATION OCTOPUS」および丸川コレクション展「巻物と触手」を開催いたします。今夏、京都の現代美術 艸居及び艸居アネックスにて開催された同個展・コレクション展に引き続き、東京においての初個展、初展示となります。

本展では、ハマーの代表作である、多彩でエキゾチックな動物の皮と金箔押しを特徴とするマケトリー（木象嵌）作品、四国産の手漉き和紙に描写したドローイング作品、陶作品と、ユダヤ人と日本人という異文化間に成り立つ友情や共感から始まったというハマー作品の丸川コレクションより貴重な過去作を展示し、作家のこれまでの活動が最新作とどのような繋がりを持っているのかを検証します。

世界的な移民問題や自身の家系がたどってきた歴史に触発されたハマーは今回、継続的に展開している《Kovno/Kobe》（コブノ／神戸）プロジェクトの最新作を発表します。リトアニアのコブノ（現・カウナス）のユダヤ人が日本人外交官・杉原千畝（すぎはら ちうね）の「命のビザ」発給によって大挙して国外へと逃れ、ロシアを経てやがて神戸で逗留するという第二次世界大戦中に起こった出来事を見つめるプロジェクトです。

杉原千畝は、1924 年に中国のハルビン日本領事館に外交官として就任し、1939 年にリトアニアの在カウナス日本領事館領事代理になりました。ナチスによるユダヤ人迫害も激しさを増し、受け入れ先がなくなり、ポーランドからリトアニアに逃亡してきたユダヤ避難民が、閉鎖間際の日本領事館に通過ビザを求めて来ました。

「正規の手続きができない者に、ビザを出してはいけない」と外務省に命令されたにもかかわらず、杉原はビザを発給しユダヤ人の命を救う道を選びました。一人でも多くの命を救うために、入国ビザを必要としない南米キュラソー行き「命のビザ」を少しの時間も惜しんで書き続けた杉原は、領事館を退去した後もホテルで渡航許可証を書き続けました。出国前最後の日、駅まで押し掛けてきたユダヤ人たちにも発車間際まで渡航許可証を書き、最後の渡航許可証は車窓から手渡したのです。1ヶ月間で発給したビザは 2139 通になります。

日本通過ビザを取得したユダヤ人避難民は、鉄道でシベリアを横断し、ウラジオストクより敦賀に日本に上陸しました。彼らが世界各国へ避難する途中経由した神戸および横浜の文化は、ユダヤ文化とは大きく異なるものでした。

「急激かつ突発的に異文化に接するとき、他者というものはどう見えてくるのだろうか」——この自身の問いに対しハマーは記号論（記号、シンボル、用途、解釈を中心とする思想体系）を援用して解き明かそうとします。アウトサイダーの誤解と曲解さ

れた日本像が織りなす日本の歴史を思うとき、この問いはいっそう強い関連性を帯びてきます。難民の受け入れ側は難民をどう見ているのか？そして、その逆はどうだろうと——。初めて日本へやってきた西欧人が経験した文化的衝突を描き出す16世紀の南蛮屏風から着想を得たハマー作品は、神戸に逗留した東欧諸国のユダヤ人の経験への共鳴を試みます。ハマー作品《Operation Octopus》は記号論的な表象というテーマに深く入り込んでゆき、タコをユダヤ人に替わるイメージとしてとらえ、ユダヤ人難民の巻き毛の髪をタコの足になぞらえています。

京都・蛸薬師（たこやくし）堂に伝わる、よく知られた逸話があります。戒律を破った僧侶が、死にゆく御母堂が食べたいと望んだことから生きたままのタコをたずさえて京のまちを歩いたという説話、ハマーはこれを今回の展示の中心に据えています。——住職や寺内の僧侶が、道ゆくこの僧侶を捕まえて箱の中身は何かと問いかけ、背徳の僧侶が箱の蓋を開けると目を疑う光景がそこにありました。タコは箱の中で経典に姿を変えていたのです——。ユダヤ教理を修めた者は、数百人単位の虐殺がありながらも、杉原千畝の手によって救済され日本へと逃れました。ハマーがタコの足になぞらえている、巻き毛をたたえる若いユダヤ人学者の大部分は、ユダヤ教の経典であるトーラの巻物の守護役を務めていました。今回、ハマーは蛸薬師道の伝承を持ち込んで、コブノから神戸へたどったユダヤ人の記号論的な解釈に重ね合わせています。

行き場を失い離散した人びとに起こる自己性の変容と崩壊——多彩でエキゾチックな動物の皮を配し、制作には骨の折れるマケトリー作品ですが、ハマーは半ば抽象的かつ比喩的なスタイルで、断片化されたアイデンティティのパズルというべきものを精緻に再構成しています。本作品で描写されるタコは、羊皮に綴られたトーラへと、まざまざとその姿を変えます。

本個展の表題作《Operation Octopus, 2020》は、サケ、リザードシャーク、カエル、ビーバーの尻尾、アザラシ、ヘビ、エイなどの皮を配した木象嵌作品で、1930年代の日本を魅了した、アールデコの影響が色濃いヨーロッパ的なデザインを取り入れています。本作品が示唆するものは、動物が経典へと変貌を遂げるなかで生まれる奇跡的な瞬間であり、異文化間での解釈の相違を下敷きとした鏡像です。本大型作品では、帽子の中にあるタコは敬虔な巻き髪のユダヤ人に、カニの甲羅に見立てた巻物の上端にあるトーラ冠はカニへと、それぞれの形態の変容が見て取れます。

この大型作品に加えて、今回3点の小さなレザーパネル作品も展示し、大型作品と同様にユダヤ人になぞらえたタコが経典に変化を遂げる瞬間を見つめます。そのほか、同じく京都に伝わる伝承を取り上げたドローイング7点、タコが本を象った木製ブロックに姿を変える陶作品3点も紹介いたします。

# SOKYO ATSUMI

ジョナサン・ハマー

1960年シカゴ生まれ。現在スペインに在住し制作。これまでに45回以上の個展を様々な国にて行う。30年に渡りドローイングや写真、書籍、彫刻、陶、版画などに加え、代名詞でもある珍しい動物たちの皮を繋ぎ合わせた装飾パネルを作成。これまでドイツ、スイス、ノルウェー、フランス、イギリス、アメリカ、メキシコ、そして日本にて幅広く展示を行っている。ニューヨークでは10回の個展を開催（そのうち5回はマシュー・マークス・ギャラリーにて）。美術館での数多くのグループ展に加え、ジュネーヴ現代美術センター（ジュネーヴ・スイス）やバークレー美術館（バークレー・カリフォルニア・アメリカ）、ダフナー美術館（ブロンクス・ニューヨーク・アメリカ）にて個展を行っている。コレクションには、ニューヨーク近代美術館（ニューヨーク・アメリカ）、サンフランシスコ近代美術館（サンフランシスコ・カリフォルニア・アメリカ）、ロサンゼルス現代美術館（ロサンゼルス・カリフォルニア・アメリカ）、アーマンド・ハマー美術館（ロサンゼルス・カリフォルニア・アメリカ）、バークレー美術館（バークレー・カリフォルニア・アメリカ）、ホイットニー美術館（ニューヨーク・アメリカ）、ジュメックス・コレクション（メキシコ）などがある。出版物には『球と金槌（BALL AND HAMMER）』（エール大学出版、2002年）があり、チューリッヒ・ダダに関する批評を執筆している。入賞歴には、アート・マターズ・ニューヨーク、プロ・ヘルヴェチア（スイス・アート・カウンスル）、ニューヨーク・ユダヤ文化記念財団、ポロック・クラスナー財団、ピュー慈善信託などがある。また、スペインのアーティスト・イン・レジデンス「ヴィラ・ベルジュリー」の創設者である。

是非、貴誌・貴社にてご紹介いただけますと幸甚に存じます。

掲載用、写真の貸出などご質問がございましたら下記までご連絡頂けますと幸いです。

プレス担当:元林久美子

〒605-0089 京都市東山区古門前通大和大路東入元町 381-2

motobayashi@gallery-sokyo.jp

Tel: 075-746-4456 Fax: 075-746-4457

SOKYO ATSUMI

140-0002 東京都品川区東品川 1-32-8 TERRADA ART COMPLEX II 3階

+ 81 (0)80 7591 5212